

エドヴァルド・ムンクの女性表現 ー《生命のダンス》を中心に

A Study on the Representation of Women in Edvard Munch:
By interpretation of “The Dance of Life”

地域キュレーションコース

坂田 有美

Sakata Yumi

研究目的

エドヴァルド・ムンク(1863-1944)は、溶けるような形や鮮烈な色彩といった独自の表現で、愛や死、苦悩や絶望といった人間の内面を描き続けた画家である。本稿ではムンクがファム・ファタル(魔性の女)を描いた画家であるという評価に反論する。そのために《生命のダンス》(1899-1900)(図1)に着目し、ムンクが女性に対しどのような社会的役割や性質を捉えていたのか、男女が愛することにどのような価値観を抱いていたのかを考察する。



図1 E・ムンク、《生命のダンス》、1899-1900、オスロ国立美術館

ファム・ファタルの登場とムンク神話の払拭

ファム・ファタルとは19世紀末から描かれるようになった、男性の不幸を喜ぶ魔性の女のことを指す。これは当時女性が、経済や政治の面で社会的に進出するようになり、それに反感を抱いた男性が、未知なる女性への恐れと憧れを映し出し生まれた存在である。ムンクは《マドンナ》(図2)のような官能的な絵画から、一般的にファム・ファタルと強く結び付けられる傾向にある。しかし、彼を過激で恐ろしい女性を描き続けた画家だ、と一概に言うことはムンクを病的な天才だと神話化することに繋がる。むしろ、彼はジェンダーが変容する当時の時代を観察し、《遺産》といった作品で理不尽な事象への問題提起を行った。また新たに登場した従来の性別らしくない男女にも関心を抱いていたと考えられる。

生命のフリーズ

《生命のダンス》は「生命のフリーズ」(1902)という連作に出品された。この連作は一室の壁全体を作品で覆い、象徴的なモチーフを複数用いることで、作品同士が互いに複雑な事象を説明しあうような構想であった。象徴的なモチーフとしては、《メランコ

リー》(図3)などに登場する海が例に挙げられる。ここでの海は、人物の複雑な心情を表現している。

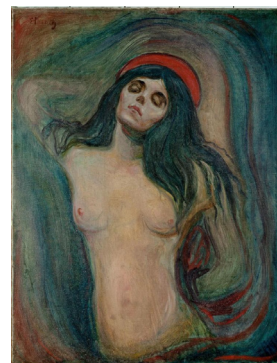


図2 E・ムンク、《マドンナ》、1894、オスロ市立ムンク美術館



図3 E・ムンク、《メランコリー》、1893、オスロ市立ムンク美術館

《生命のダンス》の考察

本研究では、前景の女性達が、1人の女の一生を描いたものだと仮定し、服の色が変化する意味、また「生命のダンス」という言葉の意味を明らかにした。まず白い服の女性は、中央の男女に向かっている点や衣装に退廃を意味する花柄が描かれている点から、純潔と退廃の多重的な意味を持つ存在である。次に赤い服の女性は後景の男女と対比されている点から、肉体関係を交えるだけでなく、精神的にも深く愛している状態だと考えた。このような性や自身の運命を主体的に決める女性は19世紀に登場した概念であり、そのような女性像にムンクは魅力と脅威の感情を抱いていたと考える。そして、黒い服の女性は手をふさいだポーズをとり、当時ムンクが女性問題に悩んでいたことから、彼女は男性を愛することができない負の欠陥を意味する存在だと考えた。最後に「生命のダンス」という言葉の意味を考えた。本作品では女性が男性を服従させているのではなく、互いが影響を及ぼしあっている。このことから、「生命のダンス」とは男女各々が運命を狂わせたり、抗ったりし、悩み苦しみながら異性を愛することだと考えた。

結論

以上の考察より、ムンクは《生命のダンス》において、レディーか娼婦か、ファム・ファタルかという区別ではなくることのできない、独自の女性像を生みだしたことが明らかになった。彼は《生命のダンス》において、19世紀に登場した自身の運命を決める女性への魅力と脅威を描き、そしてそのような女性との生き生きとしつつ悲観的な恋愛観を表現している。